



第十卷

万亭應賀作

外題

上

Gōkan: (012)
ShakaHassō.
Part 3. Book 21-

~ 13
3749
11



門 13
號 3749
卷 11

倭文庫拾一編 上



意加えゆく
喜ふふ画

上重
仕入

金網

釋迦八相倭文庫第二拾一編之序

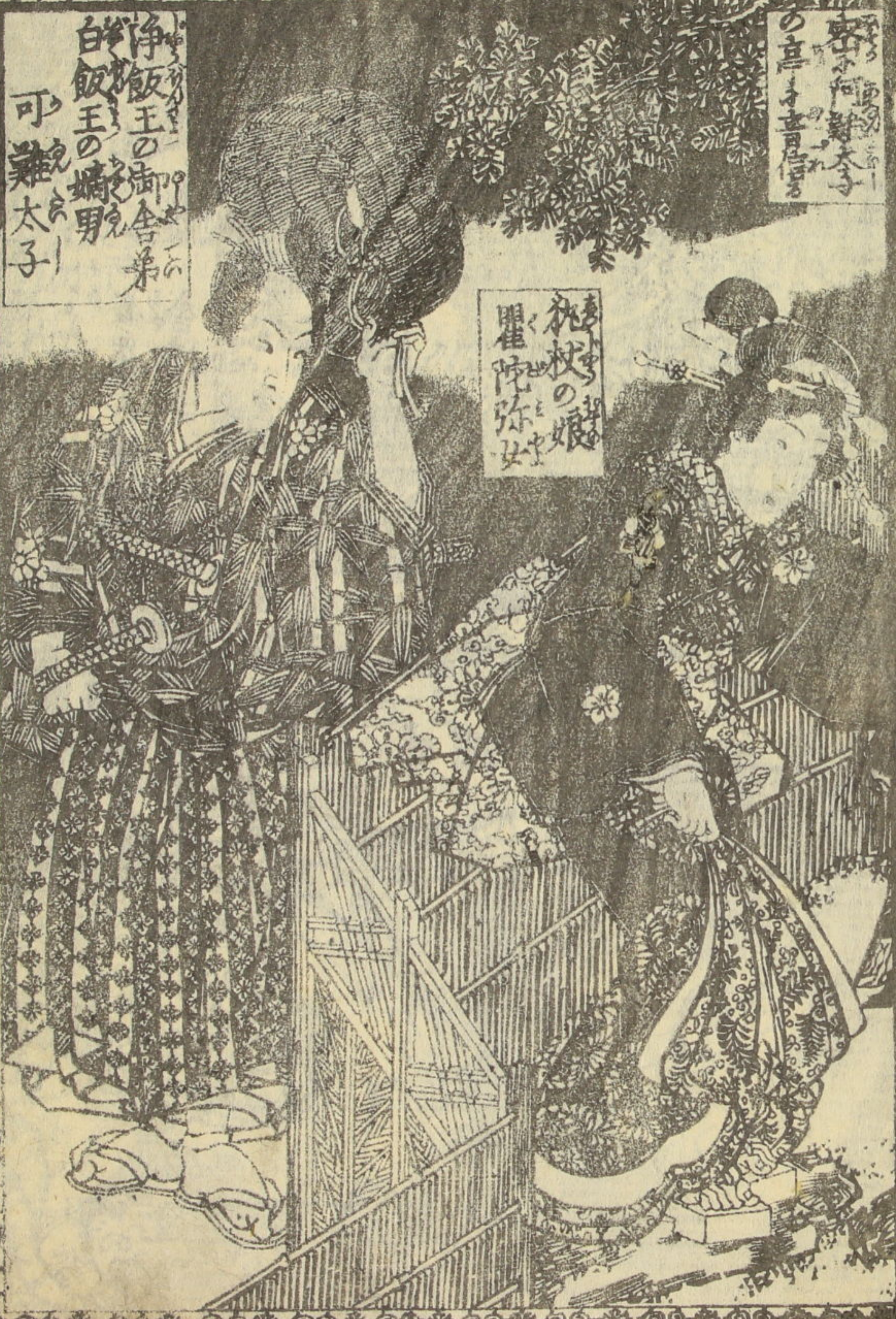
夫極善動天地極惡亦動天地... 功利天の帝釋天兜摩貨多羅河... 夫人を奪取依之舎掃の鞞羅睺阿修羅大不怒て十六... 刀之十曲旬の天身小現下生涯の耻れ小過ぎと四海の六軍をひて喜見城... 帝釋六陣の隊と立守護とされと終ふ六陣の軍乱て危けは... 善法堂... 杏葉煎般若の空寂と講讀とを... 天帝ハ舎掃を連て... 須弥山... 金翅鳥の卵ありこれと踏むと走ればこの不殺生の徳... 金翅鳥の助と受一此説を諸經の中より抄出して其高貴をあら... 姫刀称さるのお側へ出させ花まきさるぬ此巻の評判を先希ふ

嘉永四年辛亥
孟陽吉辰發行

万亭應賀誌



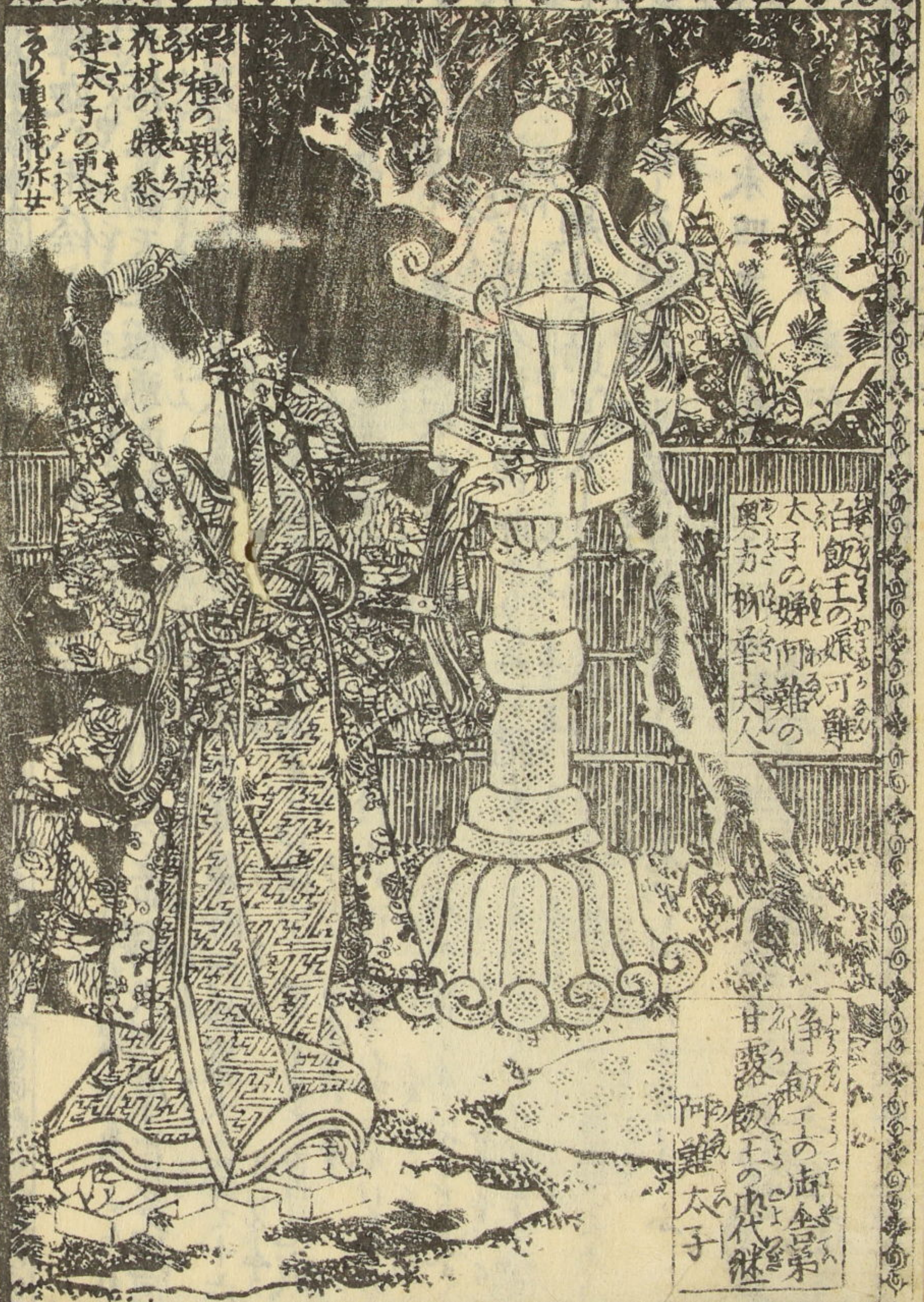
浄飯王の御舎弟
白飯王の嫡男
阿難太子



阿難太子の娘
瞿陀弥女

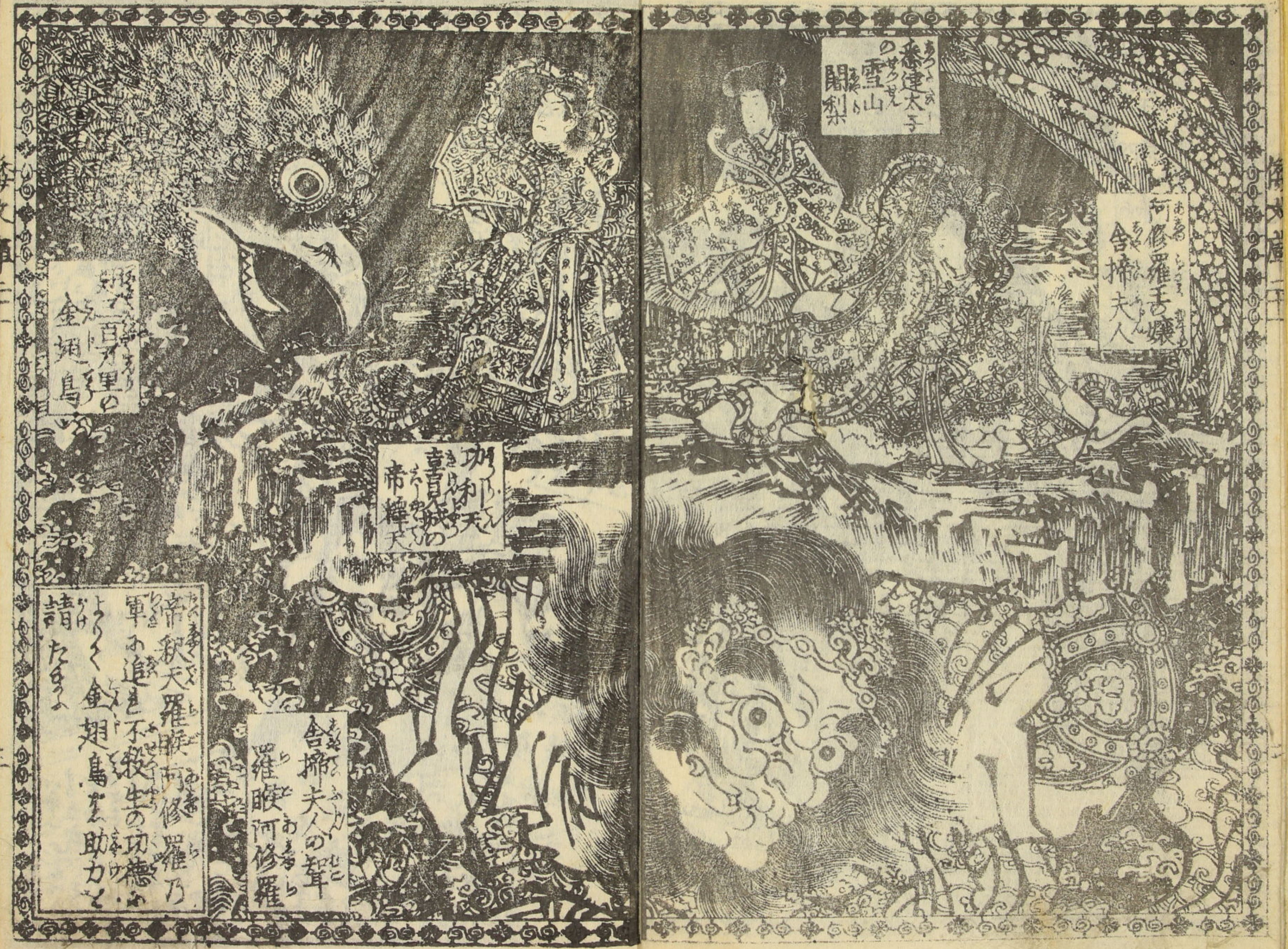
阿難太子
の喜ぶ音信

釋尊の親族
阿難太子の更夜
の喜ぶ音信



白飯王の娘可難
太子の嫡男
阿難太子

浄飯王の御舎弟
甘露飯王の代
阿難太子



金翅鳥

功利天
喜音城天
帝釋天

請
た
ま
ふ
軍
の
進
軍
不
殺
の
功
徳
を
金
翅
鳥
を
助
力
と
す

舎
旃
夫
人
の
尊
羅
睺
河
修
羅

雪
山
關
利
水

阿
修
羅
手
塚
舎
旃
夫
人

後
大
正
十
一



合利兼強の者
 のりつがまはふれ
 ぞと見せらるゆゑ
 大なるをその
 外はつとむ
 子思はるも
 だれもそを
 せとるくを

合利兼強の者
 のりつがまはふれ
 ぞと見せらるゆゑ
 大なるをその
 外はつとむ
 子思はるも
 だれもそを
 せとるくを

合利兼強の者
 のりつがまはふれ
 ぞと見せらるゆゑ
 大なるをその
 外はつとむ
 子思はるも
 だれもそを
 せとるくを

合利兼強の者
 のりつがまはふれ
 ぞと見せらるゆゑ
 大なるをその
 外はつとむ
 子思はるも
 だれもそを
 せとるくを



合利兼強の者
 のりつがまはふれ
 ぞと見せらるゆゑ
 大なるをその
 外はつとむ
 子思はるも
 だれもそを
 せとるくを

合利兼強の者
 のりつがまはふれ
 ぞと見せらるゆゑ
 大なるをその
 外はつとむ
 子思はるも
 だれもそを
 せとるくを

合利兼強の者
 のりつがまはふれ
 ぞと見せらるゆゑ
 大なるをその
 外はつとむ
 子思はるも
 だれもそを
 せとるくを

合利兼強の者
 のりつがまはふれ
 ぞと見せらるゆゑ
 大なるをその
 外はつとむ
 子思はるも
 だれもそを
 せとるくを

寛政十一年

寛政十一年... 傳文屋三... 寛政十一年... 傳文屋三... 寛政十一年... 傳文屋三...

寛政十一年... 傳文屋三... 寛政十一年... 傳文屋三... 寛政十一年... 傳文屋三...

寛政十一年... 傳文屋三... 寛政十一年... 傳文屋三... 寛政十一年... 傳文屋三...

寛政十一年... 傳文屋三... 寛政十一年... 傳文屋三... 寛政十一年... 傳文屋三...



寛政十一年... 傳文屋三... 寛政十一年... 傳文屋三... 寛政十一年... 傳文屋三...

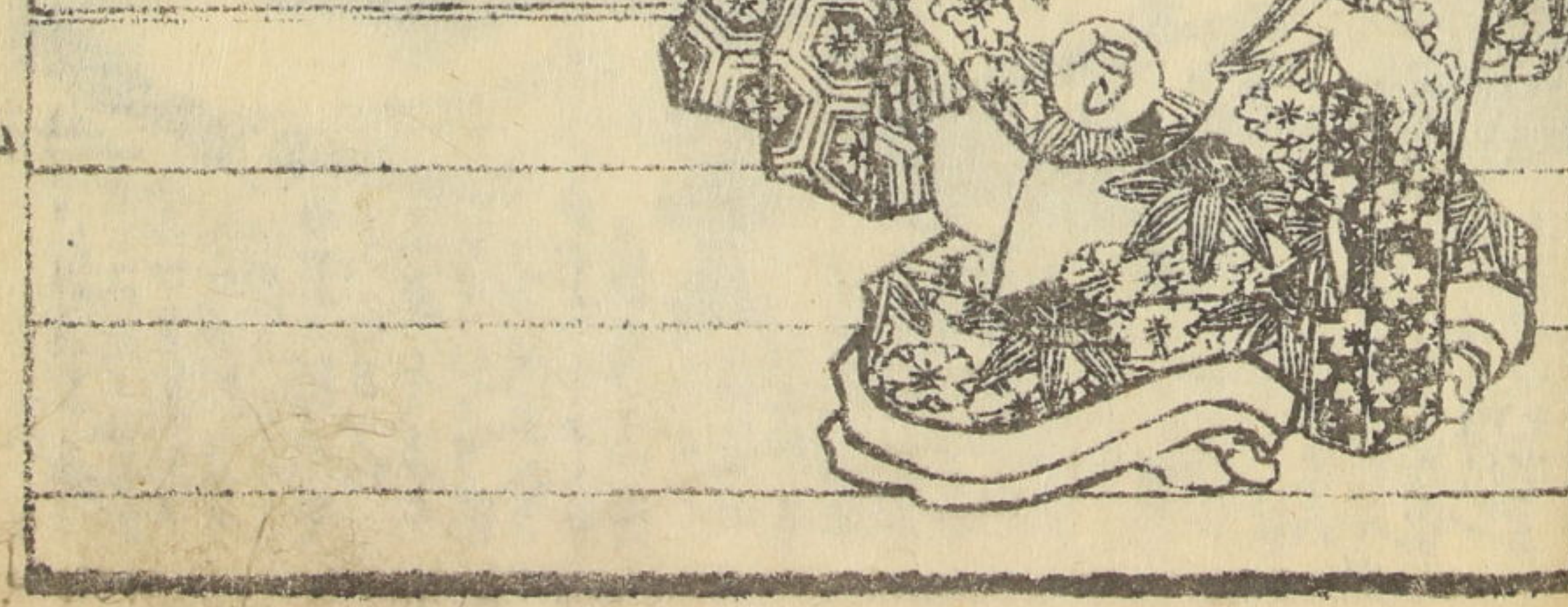
徳文庫三十一

ついでにおもむきまの
 かねがあらはれおぼろり
 ていつぞやうかたも
 けりてあつていつ
 華納のあつていつ
 せいさくのあつていつ
 とつていつかあつていつ
 せいさくのあつていつ
 すまじのあつていつ
 せいさくのあつていつ
 むしひあつていつ
 せいさくのあつていつ
 たのむあつていつ
 むしひあつていつ
 せいさくのあつていつ
 まあつていつ
 むしひあつていつ
 せいさくのあつていつ
 よつていつ
 むしひあつていつ
 せいさくのあつていつ
 さつていつ
 むしひあつていつ
 せいさくのあつていつ
 こつていつ
 むしひあつていつ
 せいさくのあつていつ



ついでにおもむきまの
 かねがあらはれおぼろり
 ていつぞやうかたも
 けりてあつていつ
 華納のあつていつ
 せいさくのあつていつ
 とつていつかあつていつ
 せいさくのあつていつ
 すまじのあつていつ
 せいさくのあつていつ
 むしひあつていつ
 せいさくのあつていつ
 たのむあつていつ
 むしひあつていつ
 せいさくのあつていつ
 まあつていつ
 むしひあつていつ
 せいさくのあつていつ
 よつていつ
 むしひあつていつ
 せいさくのあつていつ
 さつていつ
 むしひあつていつ
 せいさくのあつていつ
 こつていつ
 むしひあつていつ
 せいさくのあつていつ

ついでにおもむきまの
 かねがあらはれおぼろり
 ていつぞやうかたも
 けりてあつていつ
 華納のあつていつ
 せいさくのあつていつ
 とつていつかあつていつ
 せいさくのあつていつ
 すまじのあつていつ
 せいさくのあつていつ
 むしひあつていつ
 せいさくのあつていつ
 たのむあつていつ
 むしひあつていつ
 せいさくのあつていつ
 まあつていつ
 むしひあつていつ
 せいさくのあつていつ
 よつていつ
 むしひあつていつ
 せいさくのあつていつ
 さつていつ
 むしひあつていつ
 せいさくのあつていつ
 こつていつ
 むしひあつていつ
 せいさくのあつていつ



徳文庫三十一

安政三年丙辰春新板目錄

倭文庫	赤松譚	重井菱	譚柄瑠璃	茶番案文	神代とく月草	重本類錦繪
三十四編 三十五編 三十六編 三十七編	九編 十編	六編 七編	四編 五編	全冊	三編 四編	人形
萬享應賀作 陽齋豊國画	如淵外史作	為永春水作	西澤一鳳作 一勇齋國芳画	萬享應賀作 陽齋豊國画	同 一勇齋國芳画	上州屋重藏

應賀作豊國画



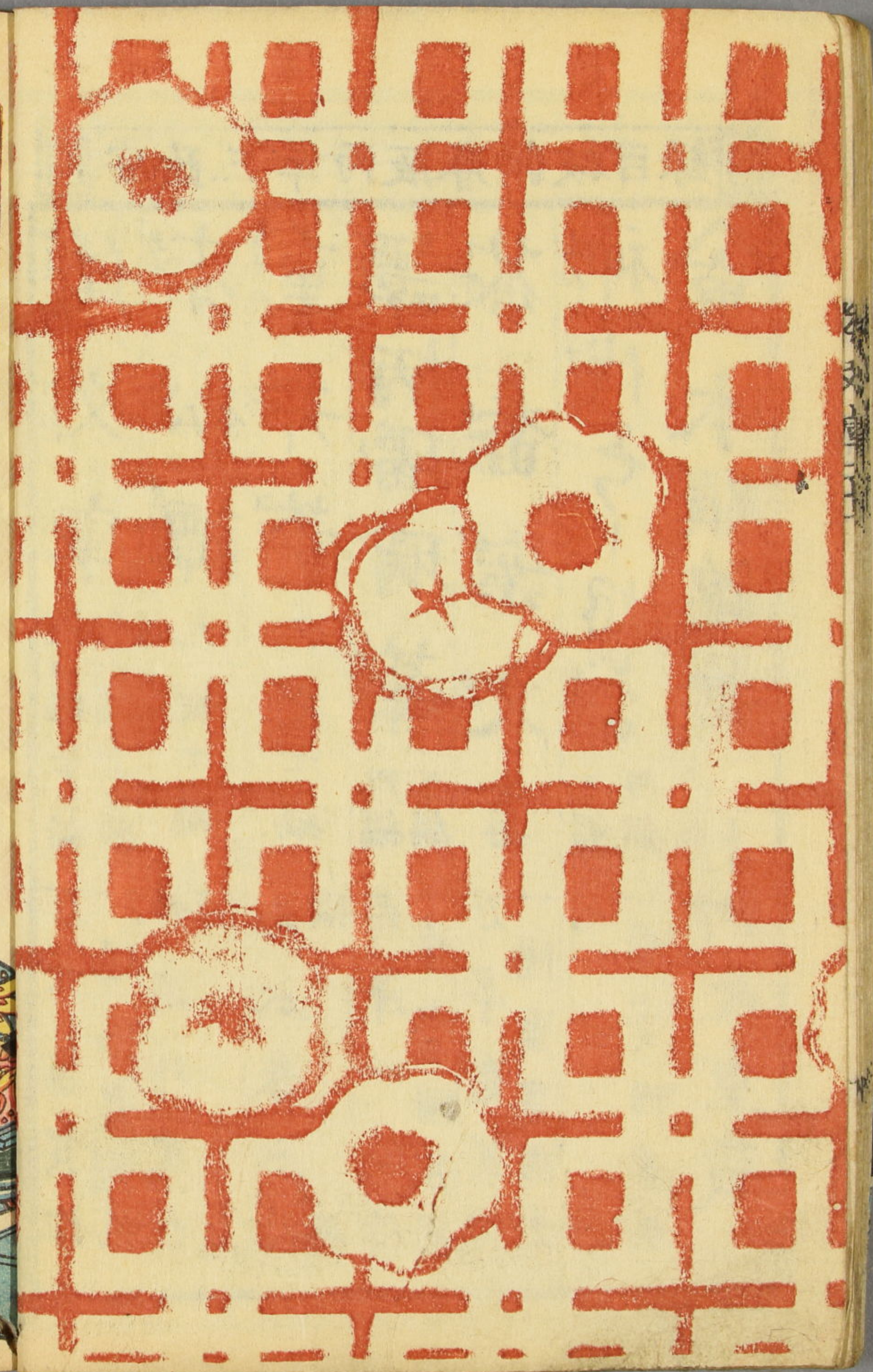
傳文庫三

一陽齋豊国画



下

倭文庫拾編





羅護阿修羅

因手樹長...
...
...

...
...
...



金翅鳥の
言万里飛ぶ
自他無の
もろくもろく
はるばる
まじり

帝
天

金
翅
鳥

金
翅
鳥
夫人

金翅鳥の
言万里飛ぶ
自他無の
もろくもろく
はるばる
まじり



金翅鳥

万亭應賀作の一陽齋豊國画



四天王

倭文庫出世双六 万亭應賀作 一陽齋豊國画

春の遊将碁双六 同 歌川貞房画

男女 役替双六 同 一陽齋豊國画作

大寶御江戸圖 極上摺 奉書六枚半續 出板

清元稽古本 初編 二編 出板

常磐津懐中本 三編 四編 追々出板仕ひ

極上摺 擬百人一首 陽齋豊國合筆



万亭應賀作



倭文庫

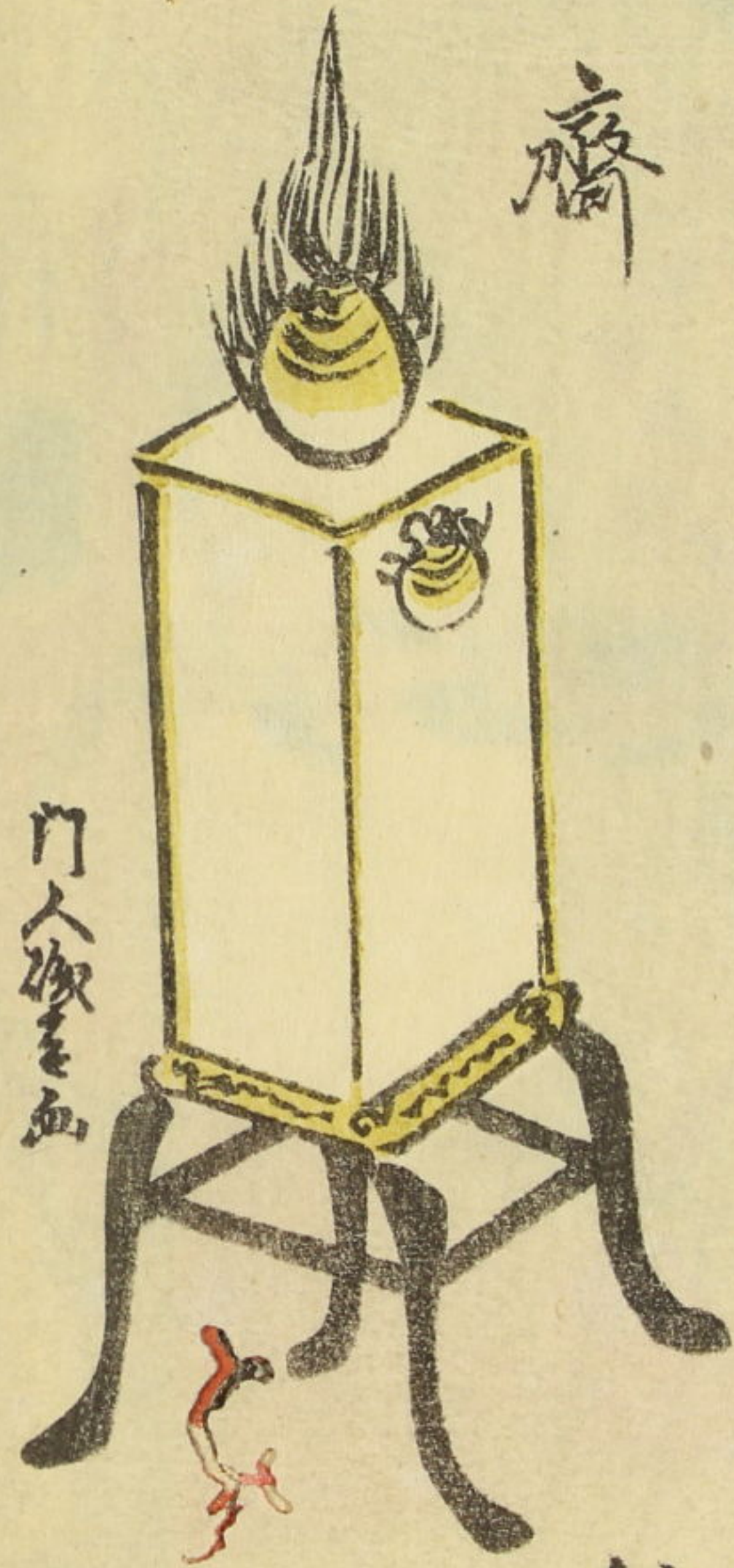
二拾二編上の巻

万亭應賀作

一陽齋

曲豆國

画



門人御筆画

錦
重
燿
梓

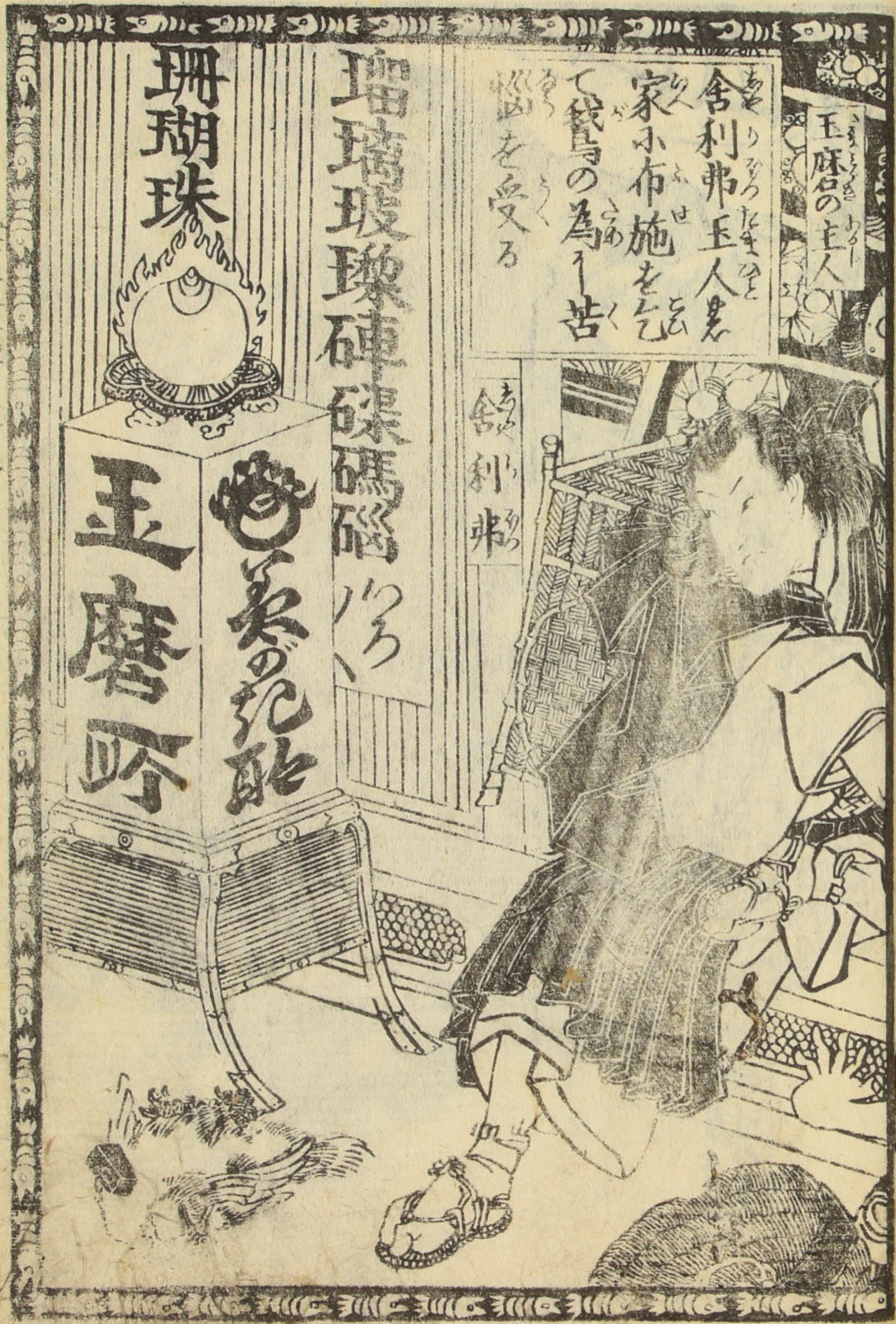
釋迦八相倭文庫二拾二編之叙

夫如来鹿野苑の説法三藏教と小乗の戒定慧及び二明
六通を得る聲聞の修行を専説する又十二因縁六度の法門
も説き是を皆小乗教と云ふ又往昔一個の比丘あり玉人の家に
布施を乞ふ玉人國王の摩尼珠を磨門口に居る折節るれ玉を
盤の上の措て比丘の食と施んと欲しと家内の奥へ入る跡を此家の
鸞玉と云ふ王これを知む出て怒りて比丘を絞縛しと曼を責比丘既打
擲を受けとも戒を護て鸞の罪を云む時小鸞自然死せりと云これらの
説不引つて悪逆大罪の連波太子禍て不獸と求て國と亡まき入る
でと此巻小終りて看官杜撰と厭むるを尚高評を賜へと云

嘉永五年壬子
孟陽新梓發行

万亭應賀誌







加藤延

私良國の
連波太子
禍を求め
國を亡ま

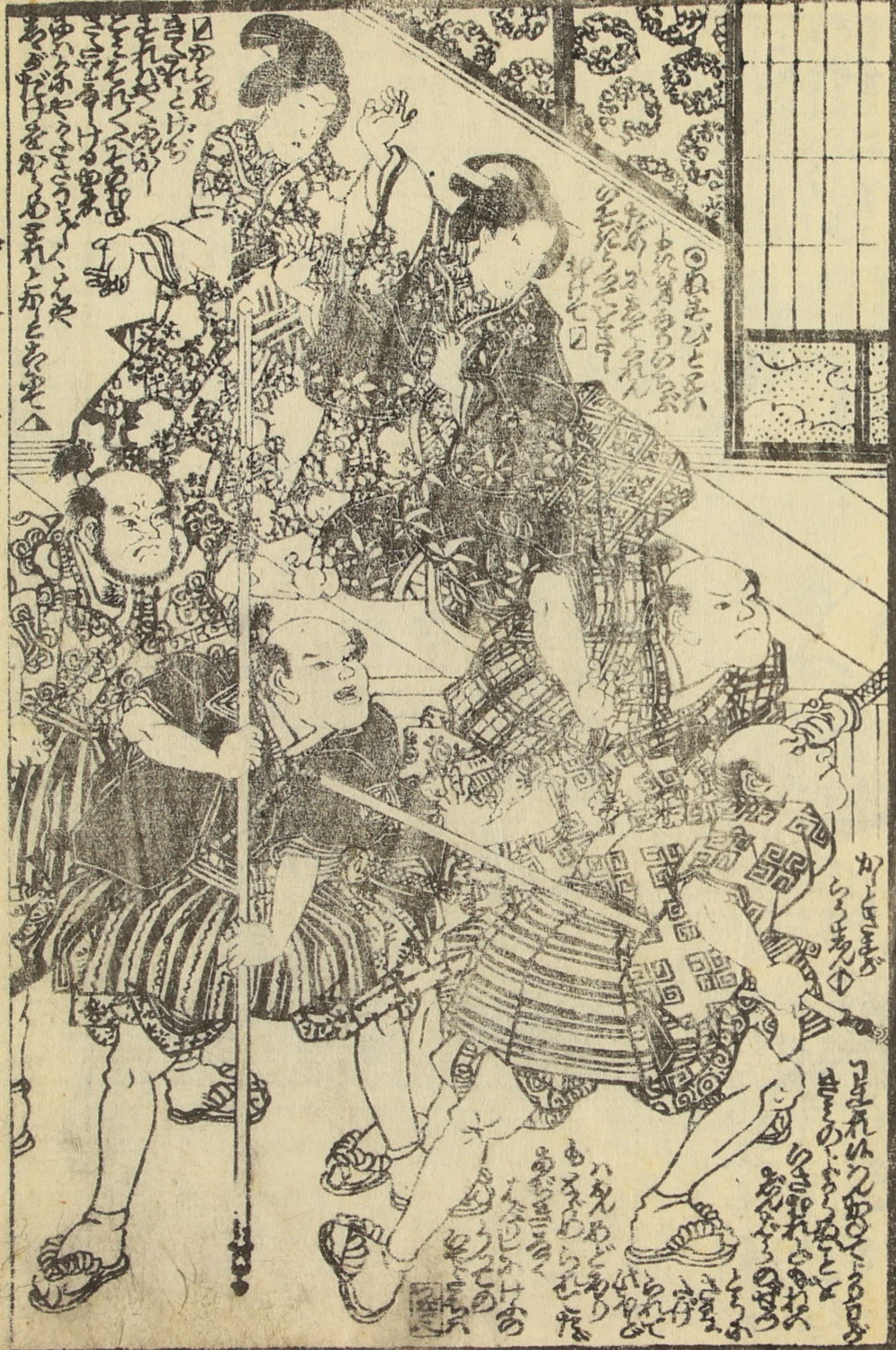
老臣頗羅隨の
子息 實頭盧

ワサビ



連波太子

加藤延の妻



あはれなるをいふは
あはれなるをいふは
あはれなるをいふは
あはれなるをいふは
あはれなるをいふは



あはれなるをいふは
あはれなるをいふは
あはれなるをいふは
あはれなるをいふは
あはれなるをいふは

安政三年丙辰春新板目錄

倭文庫 三十四編三十五編 三十六編三十七編 万 亭 應 賀 作 陽 齋 豐 國 画	赤松譚 九編十編 同 如 洲 外 史 作 画	重井菱 六編七編 同 為 永 春 水 作 画	譚柄瑠璃 四編 西 澤 一 鳳 作 画	茶番案文 全冊 一 万 亭 應 賀 作 陽 齋 豐 國 画	神代 三編 同 一 万 亭 應 賀 作 陽 齋 豐 國 画	重本類錦繪 人形 上 州 屋 重 藏
---	---------------------------------	---------------------------------	------------------------------	--	---	--------------------------

應賀作豐國画

此は豊國の画に
應賀作の
...



此は豊國の画に
應賀作の
...

倭文庫二拾二編



一陽齋豊国画





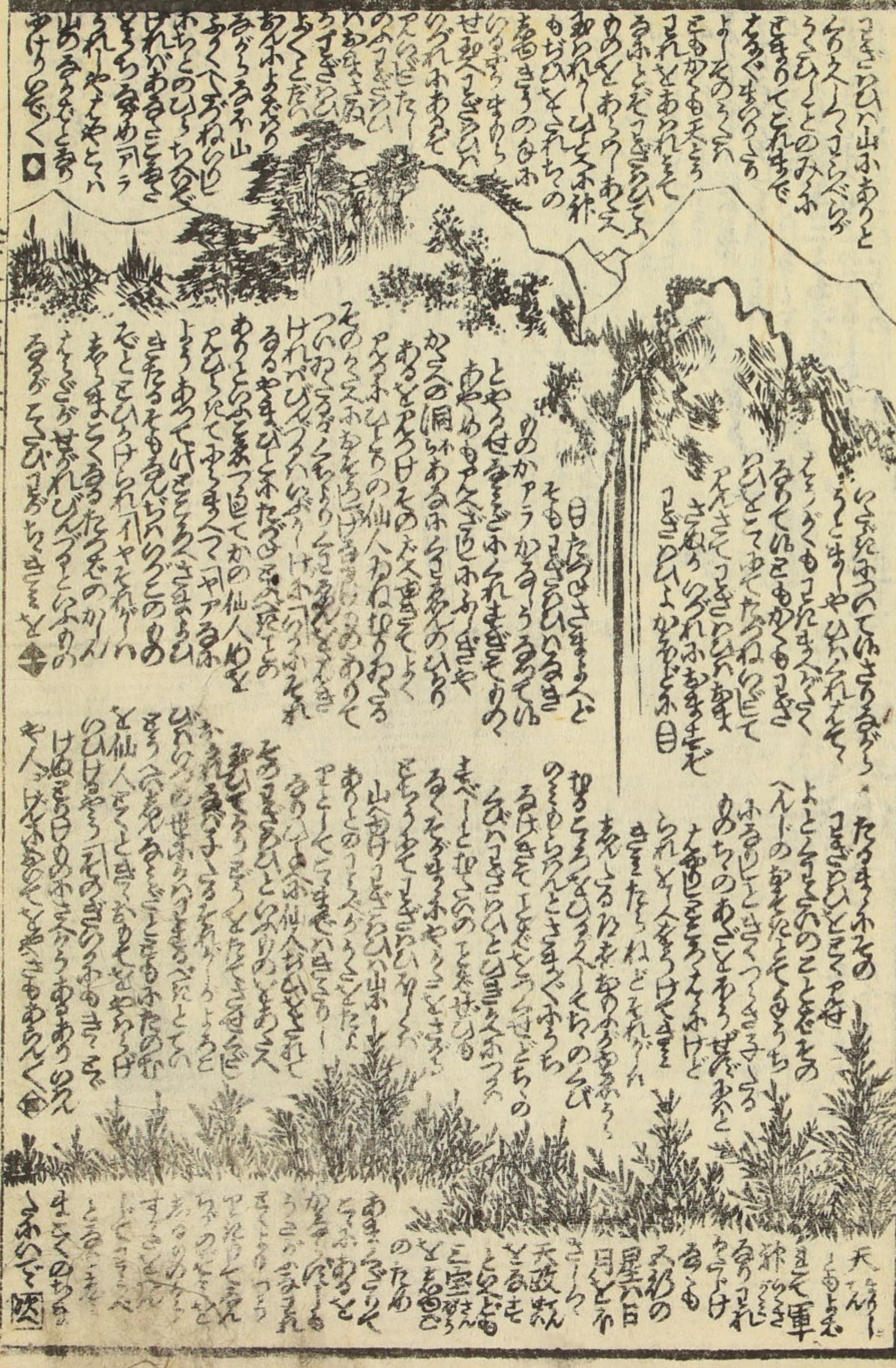
あまのついでに山あつと
うらむことのみふ
たまのてこれま
とまのの
よりの
ふかのも天を
これとあわれま
るふにぞつと
ゆのをあらうあま
あられしよしよ林
もぢのされの
あまのの
いんまの
せまの
のれあ
あつた
あつた
あつた
あつた
あつた
あつた

その
その
その
その
その
その

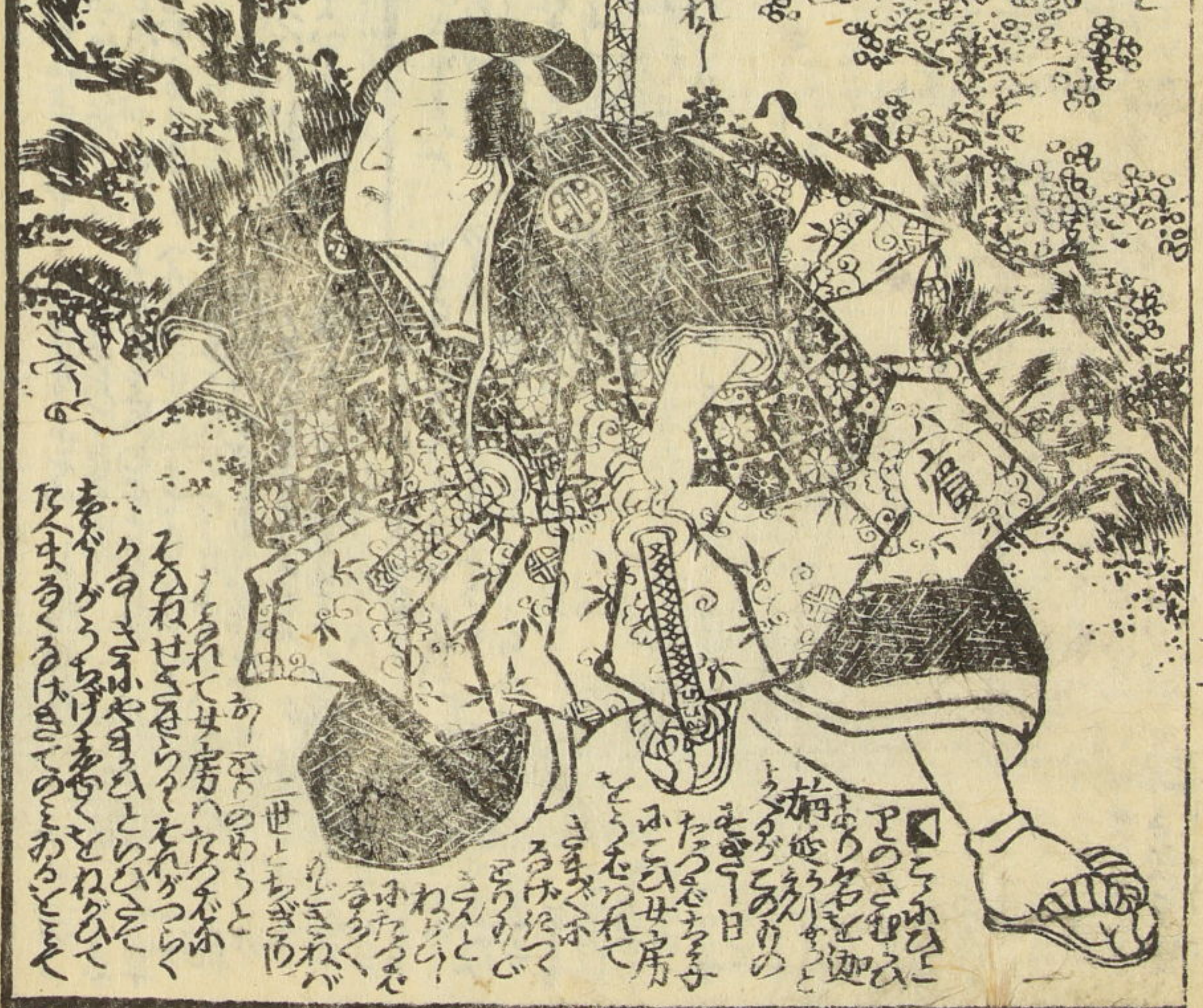
その
その
その
その
その
その

その
その
その
その
その
その

あまのついでに山あつと
うらむことのみふ
たまのてこれま
とまのの
よりの
ふかのも天を
これとあわれま
るふにぞつと
ゆのをあらうあま
あられしよしよ林
もぢのされの
あまのの
いんまの
せまの
のれあ
あつた
あつた
あつた
あつた
あつた
あつた



昔は... 仙人の身も...
 ... 山崎のあや...
 ... 山崎のあや...
 ... 山崎のあや...

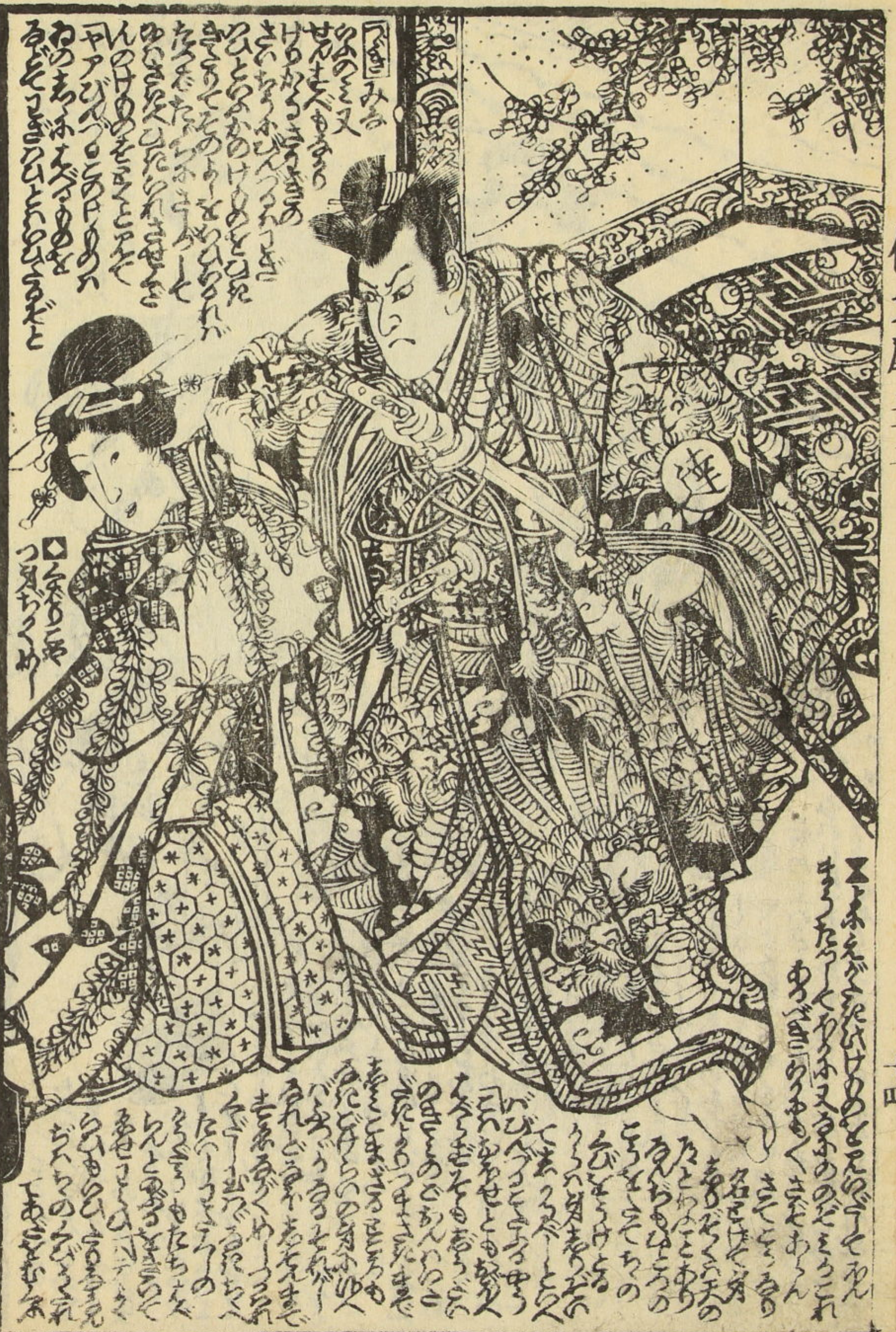


... 二世と...
 ... 二世と...
 ... 二世と...



... 仙人の身も...
 ... 仙人の身も...
 ... 仙人の身も...

... 二世と...
 ... 二世と...
 ... 二世と...



此の
 名は
 伴文屋
 此の
 名は
 伴文屋
 此の
 名は
 伴文屋

此の
 名は
 伴文屋

此の
 名は
 伴文屋

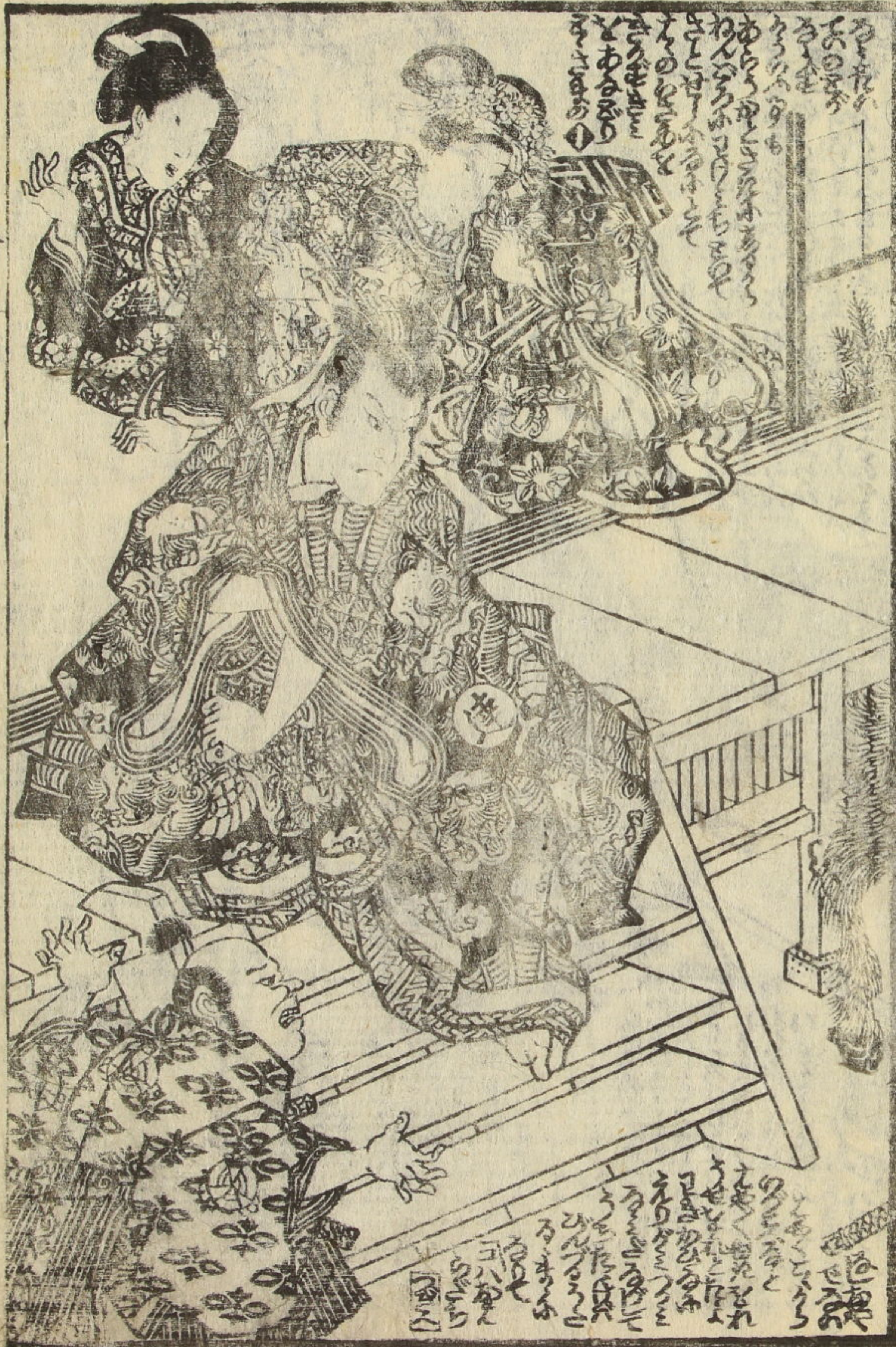
此の
 名は
 伴文屋



此の
 名は
 伴文屋

此の
 名は
 伴文屋

此の
 名は
 伴文屋



此の物語は
 昔の事なり
 今も言はれ
 ぬ事なり
 人の心は
 常ならず
 世の事は
 常ならず
 人の心は
 常ならず
 世の事は
 常ならず

此の物語は
 昔の事なり
 今も言はれ
 ぬ事なり
 人の心は
 常ならず
 世の事は
 常ならず
 人の心は
 常ならず
 世の事は
 常ならず



此の物語は
 昔の事なり
 今も言はれ
 ぬ事なり
 人の心は
 常ならず
 世の事は
 常ならず
 人の心は
 常ならず
 世の事は
 常ならず

此の物語は
 昔の事なり
 今も言はれ
 ぬ事なり
 人の心は
 常ならず
 世の事は
 常ならず
 人の心は
 常ならず
 世の事は
 常ならず



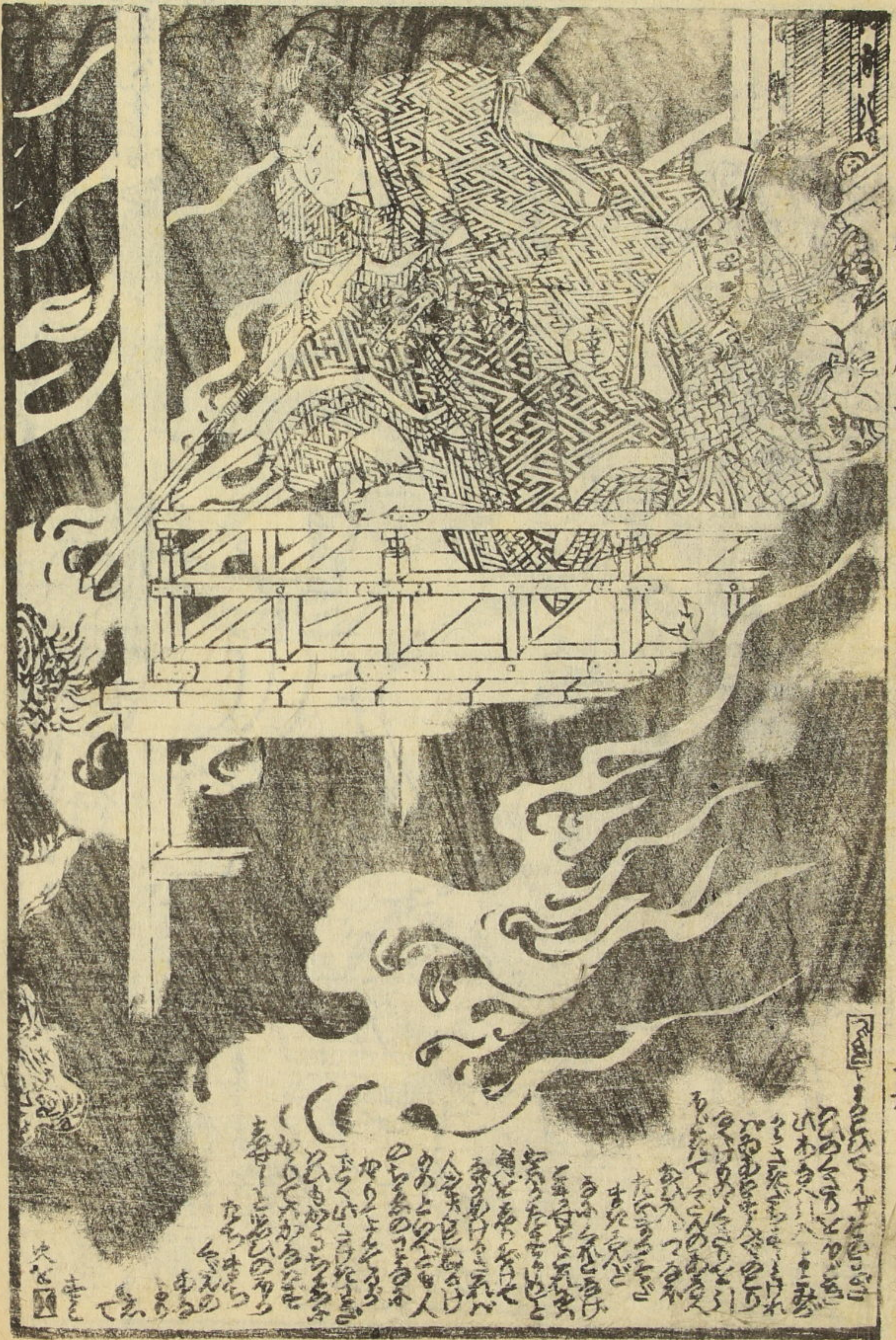




龍の口から火を吐く
龍の頭には人の顔が
龍の体は雲や霧の
龍の目は赤い
龍の尾は長い
龍の角は曲がった
龍の爪は鋭い
龍の息は熱い
龍の力は強い
龍の心は優しい
龍の魂は清い
龍の神は偉い
龍の徳は厚い
龍の功は偉い
龍の徳は厚い
龍の功は偉い
龍の徳は厚い
龍の功は偉い

龍の口から火を吐く

龍の口から火を吐く



龍の口から火を吐く

龍の口から火を吐く

龍の口から火を吐く
龍の頭には人の顔が
龍の体は雲や霧の
龍の目は赤い
龍の尾は長い
龍の角は曲がった
龍の爪は鋭い
龍の息は熱い
龍の力は強い
龍の心は優しい
龍の魂は清い
龍の神は偉い
龍の徳は厚い
龍の功は偉い
龍の徳は厚い
龍の功は偉い
龍の徳は厚い
龍の功は偉い

龍の口から火を吐く



万亭應賀作



一陽齋豊國画

倭文庫出世双六

万亭應賀作
一陽齋豊國画

春遊 将碁双六

同
歌川貞房画

男女 役替双六

同
一陽齋豊國画

大寶御江戸圖

極上摺 奉書六枚半續
はる外、のあこらひ格さま上平らな仕立
なまざり形も懐中かむ冊と高敷八重ろくあこい

清元稽古本

初編 二編 出板
早さじり形も懐中かむ冊と高敷八重ろくあこい

常磐津懐中本

初編 二編 四編
返り出板仕立

極上摺 擬百人一首

是の巻は百枚摺と表紙
仕立おろしひ石印をいね
そこの極上は表紙仕立
陽齋 豊國 合
立齋 廣重 筆

安政三年丙辰春新板目錄



天
正
十
二
年
癸
卯
春